

日本ワイルド協会第 45 回大会 シンポジウム

ワイルド研究者としての本間久雄

本間久雄（1886-1981）は明治末期から昭和後期まで、英文学者としてのみならず日本文学、演劇、また内外の美術などについて幅広い範囲にわたり評論家として活躍した。ワイルドの最初期の紹介者の一人として、翻訳（『獄中記』『石榴の家』『社会主義と人間の靈魂』など）を手がけ、ワイルド論考を発表した。本間の英文学研究においてワイルドが中心的存在であったことは論を俟たない。1928年にロンドン滞在中に入手した資料をふくむ貴重なワイルド関連文献のコレクションを構築してもいる（実践女子大学図書館蔵）。日本ワイルド協会との関連でいうなら、1975年に協会が発足した際に顧問に就任し、亡くなるまでそれをつとめた。没後40年をまもなく迎える時期にあたり、この機会にワイルド研究者としての本間久雄の業績を振り返ってみたいと考え、本シンポジウムを企画した。併せて、大正期から昭和初期にかけての日本でのワイルドと唯美主義運動の受容についても討議ができればと思っている。

『生活の藝術化』から『英国近世唯美主義の研究』へ——ラファエル前派、モリス、ワイルド 川端康雄

『生活の藝術化』は初版が1920（大正9）年に刊行されて以来、大正期から昭和初期にかけて数度版を重ね、戦後の1946（昭和21）年にも復刊されている。標題の論考に加えて「美感の頽廃」「ウィリアム・モリスの生涯」の3部からなる本書は、大正期にひとつのピークを迎えた日本でのモリス受容史のなかで特筆すべき著作である（宮澤賢治の農民芸術論にも影響を与えた）。博士論文を元にした『英国近世唯美主義の研究』は1934（昭和9）年刊行、ラファエル前派から書き起こし、ホイットラーと並んでモリスに1セクションを割り、中心人物たるワイルドに筆を進めている。モリス研究に傾注していた時期、本間は民衆芸術をめぐる論争に深く関わった。トルストイやエレン・ケイとともに、モリスの芸術論にも依拠して一連の論考を発表している。では本間のなかで民衆芸術論と唯美主義思想がどのような関係を結びつつPRB、モリス、ワイルドの系譜が捉えられているのか。この点を考察し、本シンポジウムの入り口としたい。

本間久雄と英国の 1890 年代——ワイルド、シモンズ、ビアボウム

庄子ひとみ

『滞欧印象記』（1929）は、本間久雄が英国滞在時に面会したヴィクトリア朝唯美主義を代表する文筆家・芸術家あるいはその子孫との対話が複数収録されている。1890 年代の文学や芸術を彩った立役者達の回顧録として貴重な資料であるのは勿論のこと、英国の唯美主義やジャポニズムにも造詣が深いワイルド作品研究者である本間だからこそ可能な視点と筆致は、20 世紀になっても澱のように残っていた世紀末の雰囲気伝えてくれる。本発表では同書に収録された 1929 年 1 月にアーサー・シモンズ（Arthur Symons, 1865-1945）邸を訪問した本間の回想「ア、サア・シモンズと語る」を中心に取り上げ、シモンズ夫妻と本間の会話がシモンズによるワイルド作品研究書 *A Study of Oscar Wilde* (1930) 冒頭に収録された “Art and the English Public” へと繋がったという仮説について考察する。“Art~” でシモンズは個人の才能とモラルを混同する英国大衆の偏狭さを批判しているのだが、ワイルド作品再評価のきっかけともなった同批評において日本からやってきた英文学者、本間の率直な指摘は少なからず貢献しているのではないだろうか。表面的には些細なエピソードである日英異文化交流は、英国唯美主義文学を媒介として点から線へと繋がり、20 世紀後半におけるワイルド作品再評価の道筋を作った可能性は否定できないと考えている。

ロンドンの本間久雄，1928 年——100 年前のワイルド研究

平田耀子

本間久雄は 1886 年米沢生まれ、早稲田大学で坪内逍遙と島村抱月を師として学んだ。卒業後『早稲田文学』にワイルドについての記事や翻訳を寄稿した。後、同誌の編集責任者となり、側ら『国民新聞』『読売新聞』『中央公論』などに文学、時事問題、婦人問題、演劇等々について幅広く執筆、文芸ジャーナリストとして活躍した。同時にワイルドを中心にイギリス唯美主義研究を志し 1928 年資料収集のためにイギリスに留学し帰国後、『滞欧印象記』を刊行。後イギリス滞在の成果をもとにして『英国近世唯美主義の研究』を執筆、博士号を取得した。本発表のテーマは本間がイギリスでワイルド研究参考文献を求め、ワイルドを知る人々にインタビューし、ゆかりの地を訪れ、自分なりのワイルド像形成を試みた道程をたどることである。パソコンのない時代、非効率的ではあるが、実体験に基づき臨場感を大切に研究に注目し、かつ今日的研究環境についても考えたい。